

## 飛行機の中で読むだけでフランス語会話ができるようになる本—イントロ（3）

塚田 泉

### 【タクシーでの話し方】

フランス語会話の三種の神器を覚えましたか。

- ・ボンジュール（こんにちは）
- ・メルシ（ありがとう）
- ・シルヴープレ（どうぞ）

の三つです。

これに、次の三つを加えて、六種の神器とします。

- ・パルドン（ごめんなさい）
- ・ウイ・ノン（はい・いいえ）
- ・オルヴワール（さようなら）

これらの言葉をうんと使ってください。世界にはこの六つの言葉しかないと思うくらいに、いつでも口から出てくるようにしておきます。どんな状況でも、この六つで切り抜けるつもりでいてください。

ウイ（はい・イエス）とノン（いいえ・ノー）は、いちばんよく使います。若者がウエツと言っているのもウイのなまった発音です。

たいていのことはウイと言えばすみませんが、時々ノンと言わなければならないこともあります。

ノン・メルシというのは、何かを断る時です。せっかく勧めてくれているのに、ノンとぶっきらぼうに言うだけでは申し訳ないので、メルシを付けます。

否定の意志が強い時は、ノンノン。もっと強くなれば、ノンノンノン。まさにそうだと言いたい時は、ウイウイ。大歓迎だったら、ウイウイウイ。

その次によく使うのは、ボンジュールとメルシでしょうか。誰にあってもボンジュールです。夜はボンスワール（こんばんは）を使うようにと教科書には書いてありますが、今のところはボンジュールでけっこう。

フランス人はメルシもよく使います。ギャルソンが水やカフェやムニユを持ってきてくれても、メルシ。どこかの店で買い物をして帰る時も、メルシ。何にでも感謝です。

パルドンもよく使います。フランスではチンピラ風のアンちゃんでも、肩がぶつかればパルドンと謝ります。道をあけて通してくださいという意味でこちらがパルドンと言うと、相手からは、道

をふさいでゴメンナサイのpardónが返ってきます。

オルヴワールも、使い慣れておく必要があります。これは場合によっては、単なる「さよなら」の意味ではなく、「もう、あっちへ行ってくれ」という意味にもなります。

まだ用事が終わってもいないのにオルヴワールと言われたら、相手の言いたいことは、「はいサヨナラ、さっさと帰りな」だと思ってよいでしょう。

オルヴワールやシルヴァープレの「ヴ」は、V (ヴ) であって B (ブ) ではないということを知っておく必要があります。しかし、この二つの発音を区別できない時は、オルブワールでもシルブプレでもかまいません。

ひとつ良いことをお教えしましょう。スペイン語圏の人は、V と B の区別ができないんです。彼らが発音すると、全部「ブ」になってしまいます。日本人と同じです。

フランス語の「あなた」は「ヴー」と言いますが、スペイン人が発音すると、「ブー」になってしまいます。ブーの音だけを聞くと、「泥」という意味になります。泥んこさん、あなたは何かするんですか、などと言ってるみたいですね。

でも、スペイン人は堂々と、まるで自国語のようにフランス語を喋ってますよ。ヴーレー・ヴー？ (あなたは欲しい?) をブーレー・ブー? と平気で言ったりして。

この堂々と話すということが重要なんです。堂々とはっきりした発音で、フランス語なんかよく知ってるよと言わんばかりの調子で、ボンジュールとかウイとかノンと言ってください。

日本人はつい遠慮がちになってしまいますが、6種の神器を知っていれば、もう立派なものです。この6語を駆使するだけで、フランス語がかなりできるのだらうと思われそうですが、そこが重要なんです。

このイメージを崩さないようにするために、知ってる言葉以外は喋らないようにします。何かを無理に言おうとすると、かならずボロが出ます。モタモタした話し方をしたり、まごついた態度を見せることは禁物です。

こういう時は、何でも知ってるような顔をして、悠然と黙っています。そうすると、人は思うでしょう。あの外国人はあまり話そうとはしないが、フランスでの生活には慣れているらしい、と。

フランス語ができなくても、できるような顔をして、知ってる数語を堂々と話すこと。これがカフェへ行く時の心構えだということは、別のブックレットですでに述べました。

このことは、フランスでタクシーに乗る時には特に重要になります。タクシーの運転手には悪質な者もいますので、うっかりスキを見せると、いろいろとインチキを仕掛けてきます。

パリではまだ良いほうなのなのですが、地方へ行くと、かならずと言ってよいほどクモスケ運転手に出会います。

私は、初めてリヨンへ行った時は、駅から近くのホテルまでの代金を普通の数倍取られました。

見るとメーターは倒してありませんでした。

マルセーユでは、あっちこっちグルグル回られて法外な値段にされました。

モンペリエでは、やはりメーターを倒さず、リブル（自由）の文字が出たままなので、そのことを注意しますと、お前が降りるのもリブルだと言われ、町はずれの道に荷物ごと降ろされてしまいました。

地方では、日本人はフランス語が分からないと頭から思われてしまうのでしょうか。マルセーユの運転手などは、私がフランス語を話すことを知ると、「少し回りすぎてしまった」と言い、料金の一部を返していきました。

パリでは、ほとんどこういう出来事に会わないのは、取り締まりが厳しいせいでしょうか、それとも運転手が客の種類を見て態度を変えるのでしょうか。

ただ、一度、タクシーに乗り込んだとたんにシマッタと思ったことがありました。うっかり、行き先を書いた紙を持ったまま乗り込んでしまったのです。ややこしい住所だったので、覚えるのが面倒くさくもあり、ノートを破って持ってきたのです。

案の定、運転手は、私をオノボリの観光客だと思い込んでしまいました。私が、車内灯に紙をかざして住所を読んでいると、信号で停車した運転手が振り向いて、「見せてみろ」と紙をひったくりました。それから、彼のグルグル回りが始まったのです。

フランスでのタクシーの乗り方を教えましょう。フランス語に自信が持てない間は、できるだけ話さないことです。とって、フランス語が分からないという態度を見せてはなりません。日本にいるのと同じように、堂々と振る舞います。座席に坐ったら、まずはボンジュールです。

行き先を書いた紙やノートは決して見せてはなりません。「パリの歩き方」などという本を持っているのも危険です。日本語の表紙だからといって油断はなりません。運転手も慣れていいますから、旅行案内だということはすぐに見抜いてしまいます。

そして、これが一番大事なことなのですが、目的地の名称だけをずばり言うことです。オペラならオペラ、モンマルトルならモンマルトルと、単語だけを、はっきりした声で運転手に告げます。ただし、例のシルヴァープレ（どうぞ）を付け加えることを忘れないように。

「モンマルトル、シルヴァープレ」  
これで、立派なフランス語です。

初級会話の入門書などを見ますと、やたらと難しい、複雑な表現が並べてあります。たとえば、或る本には、モンマルトルへ行きたい時は、次のように言えと書いてあります。

「プーリエヴァー・マムネー・ア・モンマルトル、シルヴァープレ」

こんな長ったらしい言葉が、いちいち初心者の口から出てくるのでしょうか。

「プーレーブー、えーと何だったっけ、マンムネーだったかな？ アッ、モンマルトル、モンマ

ルトルだよ。分かったかな」

こんなことをグチグチ言っている、にわか仕込みのフランス語初心者と、「モンマルトル、シルヴァープレ」と言ったあとは、黙して語らず、悠然と窓外の景色を眺めている人とを比べたら、どっちがフランス語がうまく見えるでしょう。

初心者が猛練習をして、この長い文章をスラスラ言ったとしても、得てして運転手の方は眉をひそめて、「えっ、何だって？ コマン？」と聞き返してくるのがオチです。

フランス語会話のコツとして、初歩のあいだは、単語だけで済ませることが重要です。文章でキレイにまとめようなどとは思わないで、単語でずばり言ったほうがよく通じますし、実際的だと言えます。

子供が言葉を覚えていくのは単語の記憶から始まります。それを論理的に結びつけて文章に仕上げるのは、次の段階です。まずは、原点に戻って、単語の羅列だけで意思を伝える練習をすべきでしょう。

それに、会話には流れがありますから、即座に相手に伝わらないと、タイミングを失ってしまいます。こういう時、会話練習帳に出ているような完全な文章を言おうとすることは、むしろ滑稽と言えます。

「私をモンマルトルまで運んでもらえるでしょうか」などと運転手に言ったら、「あんたでなかったら誰を運べって言うんだ」という答が返ってきそうです。

すこし会話に慣れてきたら、前置詞や冠詞などを付けるほうがベストだとは言えます。たとえば、どこどこ「へ」を意味する「ア」を付けて、

「ア・モンマルトル、シルヴァープレ」  
と言えば、完璧です。

同様に、「一つの」を意味する「アン」を付けて、

「アン・カフェ、シルヴァープレ」  
とギャルソンに言えば、注文しているのはカフェ一杯で、二杯ではないよ、という意味はよく伝わります。

最近、タクシーの運転手にややっこしいフランス語を言うと、通じないこともあります。パリでは、ほとんどの運転手が外国からの移住者で、クラシックなフランス語の文章を聞くと、ビックリするような人もいますからです。

中国人の運転手も増えていて、その中のひとりがこんなことを話していました。

観光客らしい日本人の女の子が二人タクシーに乗ったのですが、ふたりとも小さな辞書らしいものを手に持っていて、話をする時には、いちいち辞書をめくって言葉を探すのだそうです。

運転手が試しに中国語を話してみたところ、彼女たちは、いくつかの単語を知っていて、そのほうが話がよく通じたということでした。

基本的な単語をいくつか覚えてくれば、タクシーでの会話など、たいして困難ではないということの実例になると思います。

ただ、それよりも気になるのは、先ほども言った旅行案内の類や、会話マニュアル、辞典、音声辞書などを持って旅行している若者が時々目につくということです。

タクシー運転手がグルグル回りをし始めるくらいならまだ良いのですが、盗人やペテン師たちが目をつけると、危険なことにもなりかねません。

そのことについて書かれた、次の「ドロボウ相手の話し方」も、ぜひ読んでください。

なお、フランスでは日本とは違って、タクシーにスーツケースやキャリーバッグを積んでもらうと、小型のものでも割増料金を取られます。メーターの料金とは別に計算されますが、これはインチキではありません。もっとも、計算の仕方は、人によって差があります。

運転手へのチップは、強制的なものではありませんが、通常、料金の10%ぐらいを目安にして渡すのが慣例になっています。

飛行機の中で読むだけでフランス語会話ができるようになる本としてお勧めするのは、塚田泉著『へそ曲がりフランス語会話』ビワコ・エディション近刊です。